

## 巻 頭 言

今年1月末のウォール・ストリート・ジャーナルに載った、数学という職業が最も良いという記事については、もう何度か聞かれた方も多いと思います。その記事は、「200の職業を、職場環境、収入、将来性、体力の必要度、ストレスという観点から比較すると、最も良い職業は数学者であり、続いてアクチュアリー、統計学者の順となる」というものです。数学をする者にとっては、悪くない話です。この記事については、私もいろいろな機会に聞きました。大体、話し手は数学者でしたが、こちらが数学者と知って言うてくださる方もおられました。この記事は、数学会のホームページからもリンクされています。

記事からのリンクを見てみると、どのような評価をしたかという説明のページがあり、身の危険がなく、体力をそれほど消耗することもなく、社会的に必要性が認められて収入も多く、気楽で個人の自由度が大きいという評価をうけていることがわかります。そういう職業が良い職業という考え方をここでは問題にしないことにします。200の職業がどういうものかも説明されていて、ここにいう数学者とは何か書かれており、「数学理論や公式を、実業（経営）、教育、産業（工業）の場で教え、問題を解決する」という職業ということになっています。これを見ると、数学者はすでに出来上がった「数学理論や公式」を適用していると思われているようです。上の定義のなかに、数学者は「数学理論や公式を探求、発見、創造し」と書いてほしかったと思う一方で、何かしら数学的な考え方を応用している人はすべて数学者であるというとらえかたと、それは良いことであるという見方を感じます。さらに、そういう仕事の必要性が認識されていることがうれしいところです。

我が国においては、初等中等教育の中での数学教育の内容が、必ずしも明確でない理由で何年かごとに変更され、高等教育においては大学の教養教育の中に必ずしも数学が存在するとは限らない状況も生まれてきています。一方、数学を巡る社会の雰囲気も変化し、大きな期待がかけられたり、なんとなく普段よりも興味をもたれたり、忘れられた存在として取り上げられたりしています。

算数、数学は、人間の営みの根幹にあるもののひとつであると思いますが、それに対する見方は人によりそれぞれ違っています。私自身は、現在の社会のあらゆる場面で数学は必要となっていて、理系の人、文系の人を問わず、たとえ数式を使っていなくても、数理的な論理はいたるところで用いられているのだと思います。数学には、いたるところで出会うことになりましたが、そうして出会う数学に対する感情は人それぞれです。数学は分からない学問ということを公言する人には賛同が集まり、数学は面白いという変人にみられるという雰囲気は、日本という国の特徴にもなっているように思います。科学一般に対してそうかもしれません。理系の人、文系の人に分けられるのも変な社会です。

一方、昨年10月の日仏フォーラムの折には、産業界の様々な方から数学への期待が示されました。科学技術立国の基礎として、科学全般のレベルを上げ、そのために裾野の広

い高度な数学のレベルを維持することは、日本の将来のために不可欠のことであるという考え方は、日本の産業の将来を考える人達には、自然に受け入れられているようです。現在の科学全般の国際競争力に不安があるという話は、特に数学に関連してもしばしば話題になります。一方、入試との関係もあって、数学の教育の問題は、国民の関心事であることは疑いなく、いろいろな形でマスコミに登場しています。

数学であつかわれる事柄は、長い歴史の中では、社会であつかわれる問題の反映であることは疑いのないことです。しかし、現在の多様化した社会、数学においてもかなり細分化してきた研究分野を考えると、様々な現代社会の課題がやがて数学とかかわってくるのを待っているだけではなく、社会との接点を意識的に維持して行くことも必要になってきています。大学での数学の教育も、抽象的な論理からの演繹的な数学の構造を提示するやり方とともに、現象の観察、法則の推定、数学的な問題の定式化、数学的な結論の導出、その検証というプロセスを、様々な形で提示することも必要であるかもしれません。数学自体も大きくみると同じように発展しているともいえるでしょう。

現在の状況のまま放っておいて自然に数学と社会のかかわりあいができるのを待っていることはできないとなると、実際に現在の科学や社会の問題から数学の問題を抽出することや、実際の高度な数学の理論が適用できる対象を見いだすことを意識的に行っておられる方々の努力下、数学と社会のかかわりが深化していくことを期待せざるをえません。様々な数学教室でこのような研究を行っておられる方々、このような研究のための橋渡しをされている方々、特に科学技術振興機構の「数学と諸科学の協働によるブレークスルーの探索」の関係者の方々には、このような努力の先には必ず新しい学問分野が開けてくるという希望をもち続けていただきたいと存じます。現在は、様々な問題に興味をもって、そこから適用できる論理や数学の問題を見いだしていくという広い意味の数学者が求められています。それは、おそらく理想的な職業として描かれた数学者像のひとつの形です。科学技術立国の将来もそういう数学者を増やしていけるかどうかにかかっているのだと思います。

この3月の日本数学会年会は、私が所属する東京大学駒場キャンパスで盛会のうちに終了しました。そのときの総会で理事長の大役を仰せつかることになりました。時代の流れのなかで、数学者の視点から発言する必要もあると思います。上に述べましたような社会と数学者の良い関係をつくりあげるために、微力ながら貢献できれば幸いです。

坪 井 俊 （理事長）

東京大学大学院数理科学研究科